
『普通』の高校生の『異常』な物語

stranger

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『普通』の高校生の『異常』な物語

【Nコード】

N1068S

【作者名】

stranger

【あらすじ】

頭は普通、運動は優秀。ただそれだけの高校生・椎名千秋は特に何も無い日常に飽きていた。何をやっても満たされない、そんな日常がある日偶然見つけた変な石のせいで変化していく。「ミッドチルダ、ってなんぞ？」たどり着いたのは異世界。そこで出会ったのは『色々と危ない科学者と個性豊かな娘さん達』。彼らが引き起こした歴史に残る大事件に、千秋は自ら関わっていく。彼はその中で何を見つめるのか、何を手に入れるのか。ほのぼのだったりシリアスだったりするこの物語。「はじまるぞー」

第零章・夢の中で（前書き）

作「どうも作者のstrangerです」

千「何て読むんだ？」

作「ストレンジャーです」

千「へえー……」

作「小説書くのは初めてだったり」

千「えっ」

作「頑張って書くよ！」

「「という訳で」

「『普通』の高校生の『異常』な物語

千「楽しんで」

作「読んでいってください！」

第零章・夢の中で

退屈だ。

ものすごく退屈だ。

学校も、日常も。

授業は何をやってるかわからないし、普段は何かするわけでもない。
外に出ても特に何も無い。

毎日そんな生活。

友達や知り合いといれば楽しい、それは本当だ。

それでも何かが足りない。

足りないから満たされない。

足りないのはなんだろう。

笑顔？

学力？

恋愛？

それとも『家族』？

いくら考えてもわからない。

退屈なことばかりだ。

それでも、

「何か面白そうなことないかなー」

オレは面白いことを欲していた。

学生寮の自室でベッドに寝転がりながらオレはずっとそんなことを
呟いていた。
借りた本は読み終わってしまったし、やることなくなくなってしまっ
た。

「なんか面白いこと起きろー」

ベッドの上で転がり回るが、

「疲れた……」

余計に体力を消費してしまった。

オレはゴロンと上を向いて首につけているロケットペンダントを手
に取る。

中に入った写真に写っているのは夫婦であろう二人の男女、その二
人に囲まれた小さい男の子と女の子。

写真を見たオレは目を閉じる。

男の子は昔のオレ。

父さん、母さん、姉さんは、あの時……。

「ハア、ハア……、ハア……」

気づけば額に汗を滲ませ苦しそうに息をしていた。
目からは涙を流していた。

「ハア……」

もういいや、寝よ……」

「んあ？」

突然の振動で目が覚めた。
いつの間にか見知らぬ場所に立っていた。

「ここ……どこだ？」

様々なところにヒビが入っており、強い衝撃が加えられれば今にも崩れ落ちそうだった。

「結構危ねえな……」

てかここどこだよ、何だってこんなとこに？」

うーんと頭を傾げるが答えが出るはずもない。

元々頭は普通程度。

良くもないし悪くもない。

何より悩むのは嫌いだ。

「あーもう、訳わからん！

ここどこだっての、って何だあれ？」

目に入っただのは地面に手をつきながらゆっくり進む小さな影。
ゆっくりとこちらに近づいてくる。

暗くてよくは見えなかったが人影だった。

長い髪にリボンを付けているのを見ると女の子だろう。

「なんだってこんな所に……」

そんな時に嫌な音が聞こえた。
巨大なものが崩れたような音。

その音が今まさに女の子がいる方から聞こえてきた。

「今の音……」

まさか……！」

嫌な予感がしたオレは女の子に向かって駆け出す。
しかしその時、女の子がいる場所が崩れ出した。

オレは手を伸ばして女の子の腕を掴んだ。

「あ、危ねえ……」

おい、大丈夫か？」

下の方を見るとこちらを見上げる女の子がそこにいた。
青色の長い髪、黒いリボン、翠の瞳をした女の子。
うん、なかなかかわいいな、じゃなくて。

「今引き上げるからな
しっかり掴まっててくれよ」

「は、はい……」

返事を聞いたオレはその子を片手で持ち上げて自分の方に引き寄せた。

「ふう、危なかった……」

大丈夫か、ケガないか？」

「はい、大丈夫です……
ありがとうございました」

その子はオレに向かって頭を下げた。

「なあ、ここどこなんだ？
いつの間にかここにいたんだけど……」

あ、オレの名前は椎名千秋、普通の高校二年生だ」

この場で起こっていることを聞きたいが、警戒されたくないから一応自己紹介はしておく。

「あ、はい
私はギンガ、ギンガ・ナカジマです」

彼女も名乗ってくれた。
小さな体なのに彼女の眼はとても強くまっすぐで、それでいて綺麗だった。

「その人達！」

突然女の声が上から聞こえてきた。
上にいたのは金髪でツインテール、上手く表現できない服に黒いマント、手に柄の長い斧のようなものを持った少女だった。

（あれ？
あの子……）

どこかで見たような顔だったがい思い出せない。

「今からそちらへ救助に向かいます！
そこでジッとしててください！」

金髪の少女がそう言い終わった後すぐに体が振動で揺れた。

「や、べっ……！」

オレはギンガをその場から安全な方に突き飛ばす。
その時ギンガの手に握られていた何かがオレから離れていった。
オレの首に着けていたロケットペンダントがちぎれてギンガの方に
転がっていく。

「あっ……」

（それは……）

手を伸ばすが届かない。

それどころかどんどん離れて下に落ちている。

空がどんどん遠ざかっていき、目の前が暗くなっていった。

第一章・夢から醒めて（前書き）

前回のあらすじ

作「千秋君簡潔にお願いします」

千「変な夢見た」

作「では引き続き第一話をお楽しみください」

第一章・夢から醒めて

「ハア、ハア、ハア……」

目覚ましが鳴り響く中、目が覚めた。

今は夏ということもあってか体は汗だくでワイシャツと下に着たTシャツがびしょ濡れだった。

外からは蝉の鳴く声が聞こえ、夏特有の熱気が部屋に充満している。

「今のつて、夢……?」

オレはそう呟きながら体を起こして、鳴り響く目覚ましを止めて首に手を当てた。

「あれ?」

ない。

いつも首に着けていたペンダントがない。

「アレは、夢じゃない……?」

オレは頭を抱えて考えるが結果的に何もわからなかった。

だがあの時、通路が崩れる前に見た金髪の少女は、

「フェイトさん、だつたよな?」

オレが聖祥学園初等部の頃から何かと絡んできたフェイト・T・ハラウンさん。

中等部からは別の学校になったが、それでもフェイトさんとその親

友のなのはさん、はやてさん、アリサさん、すずかさん等の方々には世話になっていた。
あの金髪の少女はそのフェイトさんに似ていた、というかそっくりだった。

「訳わかんねえ……」

ベッドにもう一度寝転んでオレは思い出した。
体中汗だくだったことを。

「気持ち悪……」

もう一度起き上がってシャワー室へ向かい、服を脱いでシャワーを浴びた。

（まあ、さっきの夢のことは後で考えるとして……）

シャワー室から出て私服に着替える。
私服といってもオレはあまり服を持ってない。
今着たのはワイシャツに黒いスラックス。
どこからどう見ても夏期間の制服ですね。
実際は制服じゃないけどな。

「散歩でもするか」

現在時刻、午前九時半。

出かけるにはちよつと早いくらいだがそれがいい、と考えたオレは財布と携帯をポケットに入れて部屋を出ることにした。

今オレが住んでいる街の名は海鳴市。

小学生の頃にこっちに来てからずっと住んでいる、凄く過ごしやすい街だ。

独りで過ごしオレでも過ごしやすい環境だ。

歩きつづけて数分、商店街に到着。

気温のせいで汗がすごい。

余りの熱さにワイシャツの袖を捲ってハンカチで汗を拭く。

「何すっかな」

散歩以外に何をするかよく考えとけばよかった。
迂闊であつた。

「えっと、財布の中身は……」

財布の口を開いた中には野口さんが五人ほど潜んでいた。

グ、とちょうど腹も鳴りはじめたので行きつけのあの店に行くことに決めた。

「開いてるかね、っと」

行き先の開店時間よりちょっと前くらいだからのんびり歩くことにした。

「熱くなーれ、夢見た明日を、
必ずいつか捕まる」

以前友達に借りた（半ば強制的に手に入れた）ロボットアニメのOPを口ずさみながら歩く。
あれはいい作品だった。

あまりに面白くて他のOVA作品も借りた（半ば強制でk）くらいだ。

あれはハマったなあ……。

「もうそろそろだな」

今向かっているところは『翠屋』という喫茶店だ。

高町なのはさんの両親、高町士郎さんと高町桃子さんが経営する喫茶店。

オレもたまに手伝いをさせてもらってるところだ。

そろそろ開店時間のはずなのでちょうどよく朝食をとれるだろう。

「お、開いてる開いてる」

そうこうしている内に翠屋の前に着いた。
今さっき、ちょうど開店したようだった。

「おじゃましまーす」

扉を開けて中に入る。

「あら千秋くん、いらっしやい」

中に入ったオレに声をかけたのは経営者の高町桃子さん。
目茶苦茶若々しい、てか実際若い。

「おや千秋くん、おはよう」

「あ、おはようございます」

店の奥から黒い髪の人が出てきた。

この人が店長の高町士郎さん。

桃子さんの夫でこの人も若い。

誰かが『万年新婚夫婦』とか言ってたがあながち間違いでもない、
てか正しい。

「今日はどうしたんだい？」

「ちょうどいい時間なんでここで朝飯食べようかなと思ひまして」

「ああ、なるほどね

じゃあいつものでいいかい？」

「はい、お願いします」

いつものメニュー、コーヒーとサンドイッチセットという聞いたただ
けでは平凡すぎなメニュー。

だがこの翠屋のメニューは何かが違う。

単純に美味いだけではない。

そうさせている『何か』があるはずだがわからない。

（この二人の異常な若さと同じくらいの謎だな）

そんなことを考えながら席に座る。

「何か最近変わった事はあったかい？」

士郎さんが向かいの席に座って話しかけてきた。

「そこまで変わったっていうのはないですね
変な夢を見たくらいですよ」

「変な夢、かい？」

士郎さんが反応した。

「大した内容じゃないですよ
だからそういう聞いたそんな表情はやめてください」

「む、そうかい……」

残念そうな顔をしてためですから。

「はい、どうぞ」

とか話してる間にメニューが運ばれてきた。
見た目と香りが既に美味い。
どう作ったらこうなるんだ……？

「いただきます」

「どうぞ、召し上がれ」

一口。

う、美味い！
いつも頼んでるメニューだが何回食っても飽きない。
このコーヒーも絶品である。
やっぱブラックだな。

「千秋くん、この後は何か予定はあるかい？」

「まあ、街の中をぶらつくくらいですけど……
どうかしました？」

つまりは特に予定はないということだが。

「じゃあ本当に暇になったらでいいんだが……
店の手伝いをお願いしたいんだ
いいかな？」

そういうことでっかい。

どうせすぐ暇になるだろうし……。

「いいですよ

お安いごようです」

「本当かい！

ありがとう、千秋くん！」

朝食を終えたオレは翠屋を出て街を歩く。

今日は休日ということもあるのか、人が結構増えてきた。
学生やらカップルやら親子やらカップルやらが楽しそうに笑顔で街
を歩いている。

羨ましい。

そういう風に心の底から笑えるのが。
心の底から面白そうに笑えるのが。

本当に。

(羨ましいな……)

通行人を尻目にオレは歩を進める。
その時、

「千秋くん」

誰かがオレを呼んだ。
声の主は紫の髪の人と、

「ヤッホー」

「げ」

金髪の人だった。

「ちよつと『げ』って何よ、『げ』って」

「いえ、なんでもないっすよアリサさん
本当になんでもないっすから」

金髪の人、アリサさんが詰め寄ってくる。
おお怖い怖い。

「……まあ、いいけど
久しぶりね千秋くん」

「ええ、久しぶりです」

「すずかさんも久しぶりですね」

紫の髪の人、すずかさんにも挨拶をする。

「そうだね千秋くん
元気だった？」

「ええ、まあそれなりに
二人はこれからどちらに？」

「すずかの家にね
色々やることがあるから」

色々って……。

「大学関係っすか
忙しいですね大学生って……」

「しょうがないわよ、大学生だもの
千秋くんはこれからどこに？」

「行く当てもなくただブラブラと歩いてるだけです」

二人とも苦笑いはやめて下さい。
事実なんだから仕方ないでしょう。

「とは言っても、土郎さんから『よければ店を手伝ってくれないか』
とお願いされてるんで、完全に暇という訳ではありませんけど」

「そうなんだ」

千秋くんも千秋くんで大変だね」

「お二人に比べたらそこまですらないですよ」

翠屋の手伝いはやり甲斐はあるからね。

賄いも貰えるし。

……断じて賄いのために手伝う訳じゃないからな。

「すずか、もうそろそろ行かないと……」

「あ、そうだね

ごめんね千秋くん、引き止めちゃって」

「いや気にしないでいいですよ
頑張ってください」

「フツ、ありがとう
またね千秋くん」

二人はオレにじゃあね、と言い足早に歩いていった。

「大学生って大変そうだな」

オレはまるで他人事のように呟いて歩きだした。

オレは街から少し離れて小道を歩いている。
ここは何回も通ったことがある。

小学生の頃に通っていた塾の近道として何回も利用していた。

周りは見渡す限り木で人気はない。

「懐かしいな、この道も」

懐かしさを感じながらオレは歩を進める。
その時、

「……なんだありゃ？」

目の前に緑色に光る何かを見つけた。
近づいてみるとそれは緑色の宝石だった。

「……不思議物質？」

今まで見たことがないソレに興味を持ったオレは手を伸ばして触れようとした。

そのとき、ソレから強い光が発せられた。

「え、ちょ、なんだこれ」

そんなこと言ってたら、光はドンドン強くなっていた。
てか眩しい！

眩しすぎ！

「な、なんなんだよこれ！
一体何が起きてんだ！」

目を閉じて手で顔を隠す。
何も、見えない……。

……目を閉じてからしばらく経った。

目を少しだけ開く。

光はすでに収まっていた。

それから目をドンドン開いていく。

「……………ここ何処だ？」

オレの目に映ったのは先程まで歩いていた小道ではなかった。
全く知らない場所だった。

わかるのは何処かの建物の内部、ということだけ。

オレは訳がわからずその場で少しばかり呆然としていた。

第二章・見知らぬ場所で（前書き）

前回のあらすじ

作者「では千秋くん簡潔に」

千秋「不思議なことが起こりました」

作者「では第二話突入です」

第二章・見知らぬ場所で

「むう……」

オレは今起こったことに頭を抱えている。

緑色の宝石っぽい何かに近づいたら突然強く光りだして、眩しくて目を閉じたらいつの間にか知らないところに立っていた。

「どういうことだよ……」

誰かオレにわかるように説明してくれ。

って言っても何も起きないのはわかっている。

とりあえずオレが理解できるのは、ここは建物の中で誰かが住んでいるということ。

それだけである。

……マジでどうしよう。

「不幸だ……」

どこぞのラノベの主人公みたいな台詞を吐いても何か起きるわけでもない。

そんな中オレは何をすべきか考えた。

ポクポクポク、チーン。

「よし、適当に歩き回ろう」

オレがこんな答えを出したのは他でもない、『なんか面白そう』だ

からだ。

ここが何処だかわからない時は下手に動かない方がいいとよく言うが……。

こまけえこたあいいんだよ！

そうと決まれば即行動！

「さて、どっちに行こうかな」

今オレが立っている場所から左右に道が延びている。

見た感じ違いはない。

ここは直感で……、

「レッツゴー、右」

オレは右に進むことにした。

何か面白そうなの見つければいいな。

「なんだこりゃ？」

しばらく歩いてたら妙な物体が目の前にあつた。

カプセルをそのままでかくしたような物体で真ん中に黄色い球体がついている。

しかも宙に浮いてる。

目の前に立ってはいいるが何かしてくる訳でもなく、ただそこに浮いている。

「……触っても、大丈夫だよな？」

恐る恐る手を伸ばしてそれに触ってみる。

普通に機械だった。

冷たくてツルツルしている。

こんなの見たこともない。

やっぱりこの建物には人がいるみたいだ。

明らかに人工物だし。

……これ、警備ロボットとかじゃないよな？

突然発砲とかしてこないよな？

「まさかなー

そんな訳ないよなー？」

「何がっスか？」

「いやあ、この丸っこいのがいきなり発砲してきたりはしないよな
ーみたいなことをだな……」

ん？

今オレ、誰と話してた？

振り向くとそこにいたのは赤い髪を後ろで纏めている女の子。

だけど着ている服が青と紫のカラーリングの全身タイツっていう。

なんてエロげふんげふん。

てかこの娘、いつの間に後ろにいたんだ？

「それ、こっちから何かしない限りは基本無害っスよ」

彼女はそう言いながらオレの後ろにいる機械を指差す。

「あー……
そうですかい……」

「で、お兄さんは誰っスか？」

来ちゃったよ。

来ないで欲しかった質問がもう来ちゃったよ。
どうしよう……。

「侵入者っスか？」

「いや違うから
侵入者じゃないから」

「じゃあ何者なんスか？」

マズイ。

非常にマズイ。

このままだと無限ループだ。

……とりあえず正直に言おう。

ゴニョゴニョゴニョゴニョ
フムフムフムフム

「……という訳なんだが」

「緑色の発光体に近づいたら、いきなり強く光りだして眩しくて目

を閉じたらここにいた？」

説明からすると頭おかしい奴だよな、オレ。
大丈夫かな？

「ついて来るっス」

「は？」

いきなり何を言い出すんだこの娘は……？

「お兄さんをドクターに会わせるっス
ドクターはこういうの詳しいっスから」

この娘はそう言うつと、後ろを向いて歩きだした。
ドクター？

名前からするとここは研究所なのか？

……名前？

「あ」

「どうかしたっスか？」

「いや、そういえば名前言ってなかったなと……」

自己紹介は大切だと思うよお。
学校でも職場でもね。

「オレは椎名千秋
千秋って呼んでくれ」

「アタシはウエンディっス
よろしくっス千秋」

ウエンディ、ね。

今更ながらこの娘結構可愛げふんげふん。

「それじゃ、ちゃんと着いて来るっスよ」

「了解」

オレは先を歩くウエンディに着いて行く。

とは言うがさつき通った道を戻っているだけで特に何も起こらない。
だがしばらく歩いてから、ふとさつきの機械はどうしたのか気になり
オレは後ろを向いてみた。

普通に着いて来てた。

ただ、おかしいことが起きている。

一機増えている。

綺麗に横に並びながら着いて来ている。

「……お前らいつの間に増えた？」

機械のこいつらに聞いてもわかるはずもないのでオレは気にしない
ことにした。

結構先を歩いてしまっているウエンディを足早に追いかけた。

もうずいぶん歩いた。

ずっとまっすぐ続く道を未だに歩き続けている。

そして先程から着いて来ているあの機械の数も何故か六体に増えている。

ピラミッド状に隊列を組んでいて決して乱れることなく着いて来る。一機だけなら見た目は若干可愛らしいのだがこの光景は正直不気味だ。

「着いたっスよ」

アレコレ考えてる内にドクターとやらの部屋に着いたようだ。

「ドクター」

不審者もとい侵入者もとい次元漂流者を見つけたっスよー」

「スゲー嫌な説明……」

ウェンディの否定したくてもできない説明の後に部屋に入る。中にいたのは白衣を着た男の人とその隣に立っている長髪の美人さん。

「ご夫婦ですか」

「残念はずれだよ」

違ったかー……。

自信あったんだがなー……。

男にそう言われたオレは少し落ち込んだ。

「……大丈夫かい？」

「ええ、まあ、なんともないですけど」

この二人が夫婦であるかどうかは置いて……。
とりあえず自己紹介だろ。

「普通の高校生、椎名千秋です」

「これはご丁寧にありがとう
私はジェイル・スカリエッティ
よろしく千秋くん」

挨拶を返してくれた。
普通にいい人か？

「彼女はウーノ
私の秘書だよ」

「よろしくお願いします」

長髪美人ウーノさんがお辞儀してきたのでこっちもお辞儀をする。

さて……。

「ドクター、ジェイル、スカリエッティ、スカさん、変態のうち、
どれで呼べばいいですか？」

「君が呼びやすいように呼ぶといいよ」

「じゃあ変た」

「できればそれ以外でお願いしたいんだが？」

……気迫がすごいからこれ以外にしよう。

「じゃあドクターで」

「そうかい

で、君は何者だい？」

ゴニョゴニョゴニョゴニョ
フムフムフムフム

「成程……」

つまり侵入した訳ではないんだね？」

「ええ、いきなりこの施設の中にいまして……」
よかった、この人はわかるみたいだ。

「オレは何でここにいますかね？」

「おそらくキミが近づいたというその発光体が別次元に渡る能力を
持つロストロギアなんだろうね

その力でキミはこちらに飛ばされてしまった、といったところかな？
実物を見てないからどうとも言えないがね」

ロストロギア？

「えっと……」

ロストロギアって……?」

「ん？」

ああ、魔法文化がない世界から来たならわからないのも無理はないね
済まない」

ドクターが言うには、ロストロギアは過去に何らかの理由で滅んだ
世界、古代文明で造られた遺産だとか。

すごい技術で造られた物で、使い方次第では世界はおろか全次元を
崩壊させかねない程危険な物もあるらしい。

下手したらオレ死んでたんじゃねーか？

何でそんなものがあんなところに？

「で、どうするんだい？」

「えっと……何がですか？」

「いや、これからのことだが……」

この世界のことを何も知らない君には行くあてもないだろう?」

そういえばそうだった。

すっかり忘れてたよ。

「君が良ければここに住まないかい？」

「いいんですか？」

「なに、部屋ならいっぱいあるからね」

この人はアレか？

神か？

見ず知らずの人間を泊まらせる人なんてそうそういないぞ？

……まあ、あの人達はともかくとしてもだ。

「……いないのかい？」

「いえ、是非お願いします」

ドクターも好意で言ってくれてるみたいだし。
せつかくだから受けよう。

「でもいいんですか？
タダで住んでも……？」

「と、いうと？」

「いや、流石にタダで住むのは気が引けるというか……」

「別に気にしなくてもいいさ」

いや、気にするって……。

どんだけいい人だよこの人……。

「まあ、君がそこまでタダが嫌なら何かやってもらおうかな」

「マジっすか」

よかった。

ここまでしてくれるんだ。
何か手伝いでもしないと。

「正直研究の方はウーノがいれば十分だがね……
生憎家事が出来るものがないんだよ」

「つまり家事を任せたいと？」

「そうなるね」

これは好都合だ。

こう見えて家事はできる方だと自負している。
周りの人に「主夫」と呼ばれるくらいに。

「それでいいのかい？」

「ええ、泊めてもらっている間は家事を担当させてもらいます」

「了解したよ
ウエンディ」

「はいっす」

今まで黙っていたウエンディが返事をする。

「彼にこの中を案内してあげてくれ」

「りょーかいっす
行くっすよ、千秋」

「ああ」

オレはまた先に行くウエンディの後ろを着いていく。
ドクターに感謝しながら。

…ドクター side …

「……よろしいのですか？」

「何がだい？」

ウーノが私に質問してきた。

質問の内容はわかっているがあえてとぼける。

「あの千秋という少年をここにいさせえもよろしいのですか？」

「なに、問題ないさ」

そのために演技をしたんだから」

そう、全ては彼をここにいさせるための演技。

「それに彼に興味があるしね」

「興味、ですか？」

ウーノが意外そうな表情をする。

「何故かは私にもわからないがね
だが彼に興味が湧いた

それに結構強そうだしね
引き込めばこちらの戦力になってくれそうだ」

「ただの人間の彼が？」

「まあ、そう思うだろうね

私の予想ならトーレと互角か少し下、といったところだろうね」

ウーノがまさか、と声を上げる。

「それに演技とは言えああいう対応をしたからね
彼が敵になることはまずないだろう」

クツクツクと私は笑う。

「彼が介入して歴史がどう動くか楽しみだね……
ハハハッ、ハッハッハ、ハーッハッハッハッハ！」

私は両手を広げ笑い続ける。
今日はいい日だ。

第二章・見知らぬ場所で（後書き）

作者「次あたりで千秋くんのスペックを書こうかと」

千秋「変態」

作者「何を言ってるんだ君は」

椎名千秋 基本スペック（前書き）

作者「あなたのスペックです」

千秋「……」

作者「どうしました？」

千秋「誰得？」

作者「俺得」

椎名千秋 基本スペック

- ・名前…椎名千秋
- 読み…シイナチアキ
- ・年齢…17歳
- ・性別…男
- ・身長…175?
- 体重…65?
- ・容姿…少し伸ばした黒髪、両目は黒
- ・学力…良くもなく悪くもなく
- 運動…優秀、武術も少々
- ・家事…称号『主夫』
- ・性格…家族を大事にする
 - 面白そうならば何でもする
 - 普通にいい人
- ・肉弾戦…そこそこ強い
- 魔力…なし
- 特殊能力…なし
- ・出身世界…第97管理外世界『地球』

・交友関係

高町家のみなさん

ハラウン家のみなさん

八神家のみなさん

アリサ・バニングス

月村すずか

スペックとしてはこんな感じ。

椎名千秋 基本スペック（後書き）

千秋「オレって、最初はこういうキャラだったんだ？」

作者「能力持ち、オッドアイ持ちなキャラだったな」

千秋「なんとまあ」

作者「実は緑色の発光体に右腕吹っ飛ばされる予定だった」

千秋「なんだそのトンデモ設定」

作者「でもなんかつまんないなって感じて、途中からできるだけ平凡な学生にしたいくなってだな

目茶苦茶設定いじくったんだよ

キャラの立ち絵まで描いてイメージ膨らませながらさ

けどどう説明しようか悩んで……」

千秋「今の今まで悩んだと？」

作者「はい……」

千秋「馬鹿め」

作者「野郎に言われても……」

千秋「オレが女だったらよかったか？」

作者「そのネタいただき」

千秋「え、ちょ、待つ」

作者「では次の話も楽しんでくださいね」

千秋「無視すんな！」

第三章・姉妹（前書き）

作者「感想をいただいたんですよ」

千秋「ほう、よかったじゃん」

作者「読んでくれてしかも感想まで書いてくれて、すごく嬉しくてですね」

千秋「ほお」

作者「レポート終わらなかったっていう」

千秋「……は？」

作者「さて、第三章はつじまってるよー」

千秋「おいお前いまなんて」

第三章・姉妹

「災難つスね、千秋」

「一般的に見たらそうかもな」

ウエンディに案内されながら他愛ない話をしている。
さっきの機械はもういません。

ただ誰かがいそうな気配がする。
怖いなあ。

「ここって何人くらい住んでるんだ？」

「アタシとウーノ姉、トーレ姉、クア姉、チンク姉、セイン、ノー
ヴェ、ディエチ、ついでにドクターっス」

ドクターエ……。

つてことは……九人か。

食事が大変そうだな。

あとで食材を確認しとこう。

「てかオレ、他の人達のこと知らないんだけど……？
挨拶とかどうすればいいんだ？」

「えっ」

沈黙……。

「忘れてたっス……」

「……はあ」

ドクターめ、謀ったな……。あ
あの笑顔は嘘だったのか！？

「へっくし」

「……どうにかなるだろ」

「……そっすね」

このことは後で考えよう。
しかし気になる……。

「なあ、ウエンディ」

「何っすか？」

「その服装は何なんだ？」

全身タイツ……。

しかもウエンディは結構発育が
げふんげふん。思春期男子には
辛いですよ。流石にムラッ
とくるぞコレは。

「それってどういう意味っスか？」

「いや、それしかないとかはないよな？」

ウーノさんだってスーツ着てたし……。

「これしかないっスよ？」

……。

オーケー少し落ち着こう。

これしか服がないだなんてそんなことは……。

「ウエンディ」

声が聞こえる。

声の主は水色の髪の子。

そして……全身タイツ。

「あ、セイン

どうしたっスか？」

「いやドクターがね新しく人が来たって言ってたからさ
もしかしてこの人？」

「そうっスよ」

セインと呼ばれたこの娘は「へー」と声を出しながらオレをジロジロ
口見ている。

「あー、どうも……」

「名前なんて言うの？」

「……椎名千秋です」

「ふーん……」

名乗らせといてふーんって……。
ってペタペタ触らないで、くすぐりたい！

「へえ……」

「な、何だ？」

「ん、いや、なんでもないよ
あたしはセイン、よろしく」

なんかマイペースそうな娘だな……。
で、気になるのは……。

「アンタらって……どっちが姉？」

「アタシだよー」

と言ってセインが手を挙げる。

「って言っても姉の威厳なんかないっすけどね」

「なんだとー！」

……失礼、この反応を見る限りだと確かに威厳が感じられない。
しかし元気だなあこの娘らは……。

「もうちょつと姉を敬えー！」

「セインのどこを敬えばいいんスカ！」

「騒がしいぞ、セイン、ウエンディ」

奥からまた声が聞こえる。

奥から現れたのは銀髪眼帯の小さな女の子。

灰色のコートを羽織っているけど着ているのはやはり全身タイツ……。

かんべんして下さい。

「まったく……」

客人の前だぞ、みつともない……」

「う、ゴメン、チンク姉……」

「ごめんっス……」

あ、この子姉なのか……。

うん、よくあるよくある。

驚かない驚かない。

びーくるびーくる。

とか考えてたら姉と呼ばれたさっきの子が近づいてくる。

「すまない客人、妹が騒がしくて……」

「いやいや、元気なのはいいことだから……
あ、椎名千秋です、よろしく」

「チンクだ、よろしく」

いい子だ。

一発でわかったよ。

この子はいいい子だ。

「で、ウエンディ

千秋を連れて何をしていたんだ？」

「あ、忘れてたっス！

千秋を案内してたっス！

ごめんっス、千秋……」

「いや、別に気にしてないが……」

色々面白いものも見れたし。

「それではさっさと案内してしまおうか」

「え、チンク姉も来るんスか？」

「訓練も終わっているしな
私が着いていたらダメか？」

「いや、そういう訳じゃないっスけど……」

ウエンディの声がどんどん小さくなる。

「じゃあ決まりだな
セイン、お前も行くぞ」

「はい」

小さいながら姉の威厳がしっかり出ているチンク。
端から見れば小さい子に仕切られている大人2人というややカオス
な現場。

「千秋、行くぞ」

「了解」

同行人が2人増えたところでこの娘たちの案内はまだ続く。

アンナ－イタ－イム

「そういえばチンク姉、トーレ姉達はどうしてるっスか？」

「私たち以外は訓練中だぞ？」

「まだやってるんスか……」

「そういえばさつきも訓練とか言ってたな……。
訓練って一体……？」

「なあ、訓練つて何の訓練をしてるんだ？」

「ん？」

何の訓練つて、そりゃ戦闘訓練つスよ？」

「戦闘、訓練……？」

なにそれ……？

「千秋も見てみる？」

セインがオレの腕を引っ張る。

通路の脇道に入っていく。

その先で何かがぶつかり合う音が聞こえる。

「ここが訓練場だよ」

そこはなんとというか広かった。

学校の体育館をそのまま殺風景にしたような感じだ。

そしてこの空間で組み手をしている女性が二人、それを見ている女性が二人。

一人は青髪ですごく目が鋭い人。

うん、強いね。

動きに無駄がなくて攻撃も鋭い。

着のせいか雰囲気とか気迫がシグナムさんっぽい。

その人の相手をしているのが赤いショートヘアの女の子。
オレと同じ年くらいか？

この娘も強いのはわかる。
相手の人より鋭くはないけどとても力強い。

それでこの組み手を見てるのが茶髪のメガネさんと茶髪をリボンで結んでる人。

リボンさんは手に大砲みたいなのをもつてて、なんかポケーツとしてそんな雰囲気をもじだしている。

メガネさんはニコニコしながらモニターみたいなのをたたいている。
え、てか何アレ。

空中に直接出てきてる？

この世界ってあんなのがあんの？

どんな技術？

まさかドクタークオリティ？

それはさておき、このメガネさん……。

なんか怖い。

腹の中に何か隠してる感じがしないでもない。

そして皆さんお決まりの全身タイツ。

メガネさんだけマントらしきものを羽織ってる。

よしドクター！

あとでオハナシしよう。

オレだって健全な高校生男子だ。

そりゃムラッとげふんげふん。

さてここで気になることがある。

さっきまでこの組み手を見てたりリボンさんとメガネさんが何故かいつの間にオレの近くにいますということ。

何が起こった。

「あ、クア姉、ディエチ」

「ウェンディ、その人誰？」

リボンさんがウェンディにオレのことを聞く。
チンク達とは違ってオレのことは聞いてないのか？

「このお兄さんはっスね」

「椎名千秋です、よろしく」

「アタシに説明させてくれっス！」

「お断りします」

オレはそう言っつてウェンディから目を逸らす。

「チアキ……？」

「じゃあ、千秋ちゃんと呼ぼうかしらあ？

私はクアットロ、よろしくねえ千秋ちゃん？」

「私はディエチ、よろしく」

メガネさんはクアットロさんで、リボンさんはディエチか。
てかクアットロさん、ちゃん付けはやめい。

男にちゃん付けは気味が悪い。

「む、チンク達も来てたのか」

「誰だ、そいつ?」

今まで組み手してた二人が近づいてくる。

「トーレ姉、ノーヴェ、お疲れっス」

えーと、多分トーレって人は青髪の人の方で、ノーヴェって人が赤髪の方かな?

「千秋ちゃんって名前だそうよ、ノーヴェちゃん」

「ちゃんはやめてください」

「いいじゃない、千秋ちゃん」

「しまいにや泣きますよ……?」

クアットロさんに茶化されているオレを見て何人かクスクス笑っている。

これから毎日コレで呼ばれんの?
嫌だよ!

「ふむ……」

なにやらトーレさんがジロジロ見てくる。

「な、何でしょう……?」

「い、いや、何でもない」

気にするな……」

気にするなって言われると気にしちゃうたちなんでムリっす、とは言えないので気にしないでおう。

「私はトーレだ」

「アタシはノーヴェだ

よろしくな千秋ちゃん……プッ」

「ひっぱたくぞコノヤロー」

「へー、じゃあやってみろよ千・秋・ちゃ・ん」

決めた。

ノーヴェは絶対ひっぱたく。

「お、おいノーヴェ！

千秋は客人だぞ！」

「う……

わかったよ、チンク姉……」

チンクに止められるノーヴェ。

小さい子に必死に止められる大人……。そう考えるとすごく笑える。

「で、お前は一体何者だ千秋とやら？」

トーレさんが腕を組んで軽く睨みつけてくる。

怖いです。

ここはこう答えようか。

「普通の高校生です」

「……貴様は私をナメているのか？」

「すみませんでした」

ドクター公認の家事担当です」

これはマジだ。

こう言えば納得してくれるだろ。

「ドクター、公認だと？」

「ええ、本当ですよ
な、ウエンディ？」

「そうっスよトーレ姉
アタシもそこにいたんスから」

あ、睨み方が厳しくなった。
痛い、視線が痛い。

「ならいい」

アレ？

何もなかった？

「えと……どゆこと？」

「さあ、アタシにはわかんないよ？」

セインに聞いてもわからないそうだ。
ま、あまり深く考えない方がいいか。

「これからよろしくお願いします」

オレはもう一度その場の全員にお辞儀をした。

……おまけ的な……

「で、食材は？」

「一応あるっすけど……」

「え、ナニナニ？」

千秋料理できるの？」

「できなきゃこんなこと引き受けないっての
で、食材はあるんだろ？」

「あるけども……」

誰も料理できないからまだ食べれるかわかんないわよ？」

なん……だと？

「じゃあアンタらは今まで何を食ってたんだ？」

『栄養補給食』

「よし、アンタらそこに座れ」

小一時間程その場の全員に説教した。

その後、ドクターの部屋……。

「彼女達にせめて普段着をお願いします
オレだって健全な男子なんです

あの格好は刺激が強いんです
ホントにお願いします」

「わ、わかったから顔を上げてくれ
土下座までの程にキツイのかい……」

こっちから土下座してお願いしました。
これで無理だったら殴ってた、うん。

第三章・姉妹（後書き）

作者「さて、第三章も終わったところですが……」

千秋「ようやく皆と挨拶できたな」

作者「ナンバーズの皆さんは個人的にトーレ、セイン、ディエチ、ウェンディが好み」

千秋「いや、誰もアンタの好みは聞いてないけど」

作者「さて、スパロボ二週目最終話行くか」

千秋「え、ちょ、書けよ！」

第四章・突然（前書き）

作者「誤字脱字を修正しました」

千秋「意外にも気づかないもんだな、間違いつて」

作者「あ、話の内容は変わってないので安心してください」

千秋「誰も心配してないと思うが」

第四章・突然

全員とあいさつを済ませて、ドクターに土下座してから三日経った。ちなみに全身タイツの件はどうかしてくれるそうだ。よかった。

誰も料理ができず、手がつけられていなかった食材がドクタークオリティで肉も野菜も魚すらも普通に食える状態で保存されていた。残っていた食材で作った料理は、みんな喜んで食べてくれた。

というか長い間栄養補給食だけを食べていたようで、全員笑顔だったけど涙を流しながら勢いよく頬張っていた。

あのトーレさんやチンク、ディエチのクール組もボロボロ泣きながら食べていた。

クアットロさん、セイン、ノーヴェ、ウェンディに至っては食後に泣きながら抱き着いてきた。痛かった。

柔らかかったけど痛かった。そして怖かった。

この三日間でそれ以外にあったのは『携帯改造』と『ドクターによる異世界講座、ポロリはねえよ』くらいか……。

ここに来て丸一日経ってからドクターに『携帯を改造するから貸してくれないか?』といきなり言われて渡した。

なんでもこの研究所のみんなと通信できるようになるらしい……。

……別にやましい画像とかは入ってないからな?

マジだぞ?

で、渡してからいまだに返ってこない。

大丈夫……だよな?

まあ、携帯のことは置いて……。

で、昨日のことだが、ドクターにいきなり呼ばれた。

ドクターの部屋で『ドクターによる異世界講座、ポロリはねえよ』が行われた。

ちなみにネーミングはウーノさんによるものである。

それはそうと、ドクターがわざわざオレのためにこの世界について説明してくれたここにとっても感謝した。

ありがとう、ドクターとウーノさん。

この世界は『ミッドチルダ』といい、数多く存在する次元世界を管理している機関、『時空管理局』の本局がある世界だそうだ。

『時空管理局』ってのはドクター曰く、『軍隊・警察・裁判所を一つにまとめたもの』と思えばいいらしい。

その『時空管理局』……長いから『管理局』でいいや。

管理局にはオレと同じ地球出身の人がいるらしいが名前まで教えてくれなかった。

残念……。

さらに驚いたのは、この世界には『魔法』が使える人は、たいていは『魔導師』として管理局で働いているらしい。

魔法を使うには定番の『魔力』が必要だそうだが、オレにはないらしい。

悔しい……。

しかも魔力を使った武器は認められているのに『質量兵器』、いわゆる実弾銃や刀剣類の所持はダメらしい。

プラス犯罪者扱い。

なにそれこわい。

さらにドクターは管理局に何故か犯罪者として追われている身らしい。

質量兵器とかではないらしいがバラしたらバラすらしいので絶対に

言わないと決意した。

そして本日は何をする日なのかというと、トーレさんに訓練場まで来いと言われたので今向かってる最中である。

いつぞやのシグナムさんのように、いきなり「手合わせ願おう」とかは勘弁して欲しい。

痛いのだし。

シグナムさんと同じタイプではないと祈ろう。

「手合わせ願おう」

オレの祈りは神に届かなかったようです。

ここは丁重にお断りして……。

「嫌だとは言わせん」

先に手を打たれた……。

「貴様は武術かなにかをしていたんだろう？」

最初にここに来て私とノーヴェの組み手を見たときに多少なりとも分析していたようだったしな

違うか？」

なぜバレたし。

まさか気付いたとは思わなかった。

「なぜ黙っている？」

なんとか言ったらどうだ？」

「にゃあ」

「ふざけているのか？
ふざけているんだな、貴様？」

あ、やべ、怒らせちった。
どうしよう。

「もういい……！」
実力を見るだけのつもりだった……
そこまで死にたいのなら喜んで死なせてやろう！」

トーレさんが突っ込んできた。
速い、けど見えなくはない。
初撃は拳。

トーレさんの直線上から横にズレて拳を避ける。
ダメージはないけど服に掠った。
危ない。
喰らったらアウトだ。

「ほう、よく避けたな……」

「いや、今のは避けないとダメでしょ……」

「フン、ならば全て避けてみせろ！」

また突っ込んで拳を突き出してくる。
さっきよりも速い。
避けずに両腕を使ってガードする。
痛い。

衝撃で少し後ろに吹っ飛ばされる。

着地して体勢を整えて、トーレさんのいたところを見るが誰もいない。

「遅い」

突然体が揺れて、そのあと脇に痛みが走る。
オレはそのまま吹っ飛んで壁にぶつかった。

…トーレ side…

「所詮こんなものか」

壁まで吹き飛んだ千秋を見て私はそう思った。
千秋はその場で倒れたまま動かない。

「初撃を防いだのは多少驚いたが、当ててみれば存外もろいな」

しかしやり過ぎたか……。

千秋の近くまで歩いていく。

「おい起きているか？」

貴様は飯係だろうが、早く起きろ」

すぐ近くまで行って見下ろしながら千秋にそう言った。
しかしその時、私は見た。

この男がニヤリと笑っているところを。

「なっ……！？」

私は少し後ずさった。

何なんだこの男……？

なぜ、笑っている……？

「……」

奴は何も言わずにゆっくりと起き上がる。

頭が切れたのか額に血が流れ、服の脇腹部分は破れている。

奴はそんな状態で笑いながらこちらを睨みつけている。

「……」

奴はゆっくりこちらに歩いてくる。

そしていきなり突っ込んできた。

「ラアッ！」

左膝を突き出しながら飛びこんでくる。

狙いは顔。

膝蹴りを両腕でガードしたが、信じられないことに奴は即座に踵落としを放ってきた。

踵落としが避けれずに右首筋を蹴られる。

「ぐ、あつ……！」

「ハアッ！」

今の一撃でよろけた私に奴が殴りかかってくる。

「なめ、るなあっ！」

奴の拳をギリギリでかわし顔面を殴る。

「ぶっ、あが……っ！」

奴の鼻から鼻血が流れ出る。

もう一度殴ろうとするが腕が戻せない。

奴が手首を掴んでいた。

奴にそのまま引き寄せられ腹を蹴られる。

「が、はっ……！」

今の一撃でよろけ、私は膝をつく。

しかしそんなことをしているヒマはなかった。

奴が蹴りの体勢をとっていた。

奴の右足が私の横顔目がけて迫ってくる。避けなければならないの

に体が動かない。

避けなければ、避けなければ！

いや、ムリだ！

ならば防御を……！

そう思っ腕を動かそうとしたその時、私の体が吹き飛んだ。

…ウエンディ side…

「働きたくないっス」

「働いてねーだろ、アタシ達は」

そうだったっス。

「二人共、ふざけてないで早く行くぞ」

「クア姉とディエチはもう先に行っちゃったんだし、早く行くよー」

「はいっス、チンク姉」

「わかったよ、チンク姉」

「アタシに詫びはなしか、コノヤロー」

「じゃあ早く行くっすよ」

「ムシかよ……」

なんでか落ち込んでるセインは置いて、チンク姉とノーヴェと一瞬に訓練場に向かう。
そーいえば……。

「トーレ姉はどうしたんスカ？」

「アタシは聞いてないぞ」

「私もだ」

もう訓練場にいるんスカね？

まあ、そんなことは行けばわかることっス！

「早く訓練終わらせて千秋兄のご飯食べたいっス！」

「「それには同意だ」」

「アタシもー」

あ、セインがいつの間にかいるっス。
千秋兄の作るご飯が楽しみっス……。
アレのためなら何でも頑張るっス！

「てかウエンディ、千秋兄ってなんだ？」
ふっふっふ、よくぞ聞いてくれたっス、ノーヴェ……。

「千秋兄はお兄ちゃんっぽい気がするからっス！」

優しいし、一緒にいると面白いつスからねー。

「そうなのか……？」

「さあ、ってクア姉、ディエチ、なにしてんの？」

セインが訓練場の前で立ち止まってる二人を見つけたっス。
二人もアタシ達に気付いたっス。

「みんな……」

「チンクちゃん、これ見てどう思う？」

クア姉に促されて中を見ると、そこには……、

「でりゃあっ！」

「甘い！」

見た感じ本気で戦ってる千秋兄とトーレ姉がいたっス。

ちなみに今、千秋兄がハイキックをして、それをトーレ姉がガードしてたっス。

「ハアッ！」

「危なっ！」

今度はトーレ姉がパンチをして、千秋兄がそれをギリギリ避けたっス。

「何やってるんスカ、これ……？」

「私達が来たらすでにこんな状態だった」

「この映像によると……
もう20分近くやってるみたいよぉ？」

『20分！？』

思わず叫んじゃったっス。

トーレ姉相手に20分も勝負付かずって、何者なんスカ、千秋兄……？

「トーレと互角とは……」

「アイツ、何者だよ……」

「千秋スゲー……」

皆同じ反応みたいっス。

「トーレ姉様がIS発動したら千秋ちゃんに勝ち目はないわねえ……でも即戦力にはなりそうね……」

クア姉がなんか言ってるっス……。

「……」

そして無言のデイエチ。

ただジーツと二人の対決を見てるっス。

「いい加減に倒れる！」

「断る！」

トーレ姉の蹴りをかわす千秋兄。
でもなんか……。

「千秋ちゃん、そろそろ限界みたいねえ……」

トーレ姉の蹴りをかわした後、千秋兄はぐらついて膝をついたっス。
息が超切れてるっス。

「体は正直だな、千秋
もう限界だろう？」

「まだ、だつての……！」

ぐらつきながら立ち上がる千秋兄。
そこに、

「終了だよ、トーレ、千秋」

ドクターとウーノ姉が来て二人を止めたっス。

それから約一時間……。

「わかったかい、二人とも」

『はい、すいませんでした』

千秋兄とトーレ姉が正座してドクターの説教を受けてるっス。
プルプルしてるっス。

「時に千秋、君にプレゼントがあるんだが」

「な、なんでしょう……？」

千秋兄……、やっぱり限界みたいっスね……。
ドクターはそれを無視して何かを取り出したっス。
黒い手袋と……黒いリストバンドっスかね？

「ドクター、なにソレ？」

「これは千秋の武器だよ」

セインの質問にドクターはそう答えたっス。
え、でも、それって……。

「ドクター、千秋にも戦わせんの？」

「戦わせるといふよりは護身用だよ」

ノーヴェの質問にややマジメに答えるドクター。

こんな顔見たことないっす。

てか、千秋兄全然理解できてない顔してるっすけど大丈夫っすかね？

…千秋side…

ドクター。

プレゼントはうれしいけど、せめて正座はやめさせてください。
疲れと足の痺れのダブルパンチが厳しいです。

「さて、説明しておこうか」

オレに渡された手袋とリストバンドは対魔導師用の護身武器だとか
なんとか。

「手袋の方には『AMF』が使えるようにしてある
AMFっていうのは……、わかりやすく言うと魔法無力化領域のこ
とだ」

足痛い足痛い足痛い。

「無効化の範囲は君を中心に半径10mだ
ただし、あまりにも強すぎる魔法は無効化できないから注意してく
れ」

アシタイアシタイアシタイ。

「それとリストバンドの方は……なんと云おうか
空が飛べるようになるよ」

アシタイ……今なんて？

「君には魔力がない

魔力がないから空も飛べない

魔導師に対してはそれは大きなハンデだ

この世界に来たばかりの君にはキツイはずだからね
今度テストするからそのつもりで」

へー、空飛べるんだー。

あ、足の感覚無くなってきた。

「で、聞いているかい？」

「キイテルヨー」

「棒読みだと説得力ないっスよ千秋兄」

ウエンディがなんか言ってる。

そういえば最近になってウエンディが兄と読んできたのはビックリ
した。

「別に正座はやめてよかったんだがね
トーレももう正座は止めてるよ？」

なん……だと？

トーレさんの方を見ると、座ってるどころかすでに立ってた。悔しいのう悔しいのう。

「……なんだその目は？」

「いえ、なんでもないと思いたいです」

「……疲れた、寝させてもらっ」

トーレさんはもはや相手さえしてくれなくなった。そろそろ止めとこっ。

「ところでテストっていつやるんですか？」

「明日だよ」

また土下座して日にちをずらしてもらったのは言っまでもない。

…おまけ的ななにか…

「腹減った」

「腹減ったっス」

「お腹減った……」

千秋、ご飯まだ」

ノーヴェ、ウエンディ、セインの空腹コールが聞こえる。

「……空腹」

「ええい、飯はまだか！」

「千秋、まだなのか……？」

「千秋ちゃん、まだあ

「だったら、アンタらも手伝えコノヤロー」

さきほどのトーレさんとの組み手で疲れ切ってるため思っように調理できないのだ。
なのにコイツらは……。

『ご飯作れない』

「手伝いながら覚えようとしなのかアンタらは……
痛てっ、指切った！」

『ご飯まだ？』

「何なんだよ、こんな時だけ息ピッタリに空腹コールしやがって！
少しは労れ、って痛てえ！
また切った、チクシヨオオオ！」

「随分と賑やかになったね、ここも」

「騒がしいの間違いでは、ドクター？」

「どうかな……」

しかし、ご飯はまだだろうか……」

「我慢しましょう、できるまでは……」

第五章・実験、開始（前書き）

作者「大変長く待たせました」

千秋「待つてる人いんのか……？」

作者「更新待つてますと言ってくれた方がいたので、いるはず……！」
と思いたい」

千秋「それはそうと、ifの話はどうなったんだ？」

作者「皆さん興味がないのか

答えてくれた方が一人もいませんでしたよ」

千秋「質問の仕方の問題じゃないか？」

作者「今は誰も読みたくはないかと思ったので
もつと後に書きたいと思ってます

では第五章、どうぞ」

第五章・実験、開始

体中に痛みがまだ残ってる。
正直歩いてるだけで辛い。

本当は今日、ドクター作『空飛ぶリストバンド君（仮称）』と『A
MFグローブ君（仮称）』の実験をするはずだったけど、土下座し
て明日まで延ばしてもらった。

だがドクターのことだ、とても嫌な予感がする。

「君の体を完璧に回復する薬だよ」とか言いながら薬を出してきそ
うだ。

うん、有り得そうだ。

「千秋」

「ん？」

この声は……セインか？
でも、どこにいるんだ？
周りを見るが誰もいない。

「気のせい、か？」

「ちっがつよー」

セインがいきなり壁からニユルっと出てきた。

ニユルっと。

「へっへー、おっはよー、千秋」

「あ、ああ

おはよう、セイン」

少しビックリした。

少しな。

さらに服も……。

「どう、千秋？

似合う？」

いつもの全身タイツではなく、水色のＴシャツにジーンズだった。

「ああ、似合ってるよ」

「あのスーツほど、ってはいけないけど
なかなか動きやすいねこの服」

よかった。

これで嫌って言われたら、あの全身タイツにムラムラしながら過ごさ
なきゃいけないかと……。

「あ、そうだ千秋に用があつたんだ」

「用？

なんかあつたのか？」

「ドクターが呼んでたよ？」

できれば今すぐ来てくれって言ってたけど」

……嫌な予感的中？

「お断りOK？」

「ちなみに断ったら改造するってさ」

「行かせていただきます」

いや、改造はさ憧れるけどさあ……。

あのドクターだぜ？

何されるかわかりませんことよ？

「じゃあ、レッツゴー！」

「おい、ちよつと待て！」

体がまだ痛いんだって！

痛たたたたたた！

待て、セイン！

ストップ、ストオオオオオッブ！」

オレの叫びもむなしく、セインはオレごと壁の中に沈んでいった。

……痛い。

「では千秋、これを飲んでくれ」

「……何これ？」

渡されたのは赤いカプセル。
そして水。
嫌な予感しかない。

「君の体を完璧に回復する薬だよ」

的ですか。

思いついたドクターの台詞も一字一句間違っすらない。

「さあ、飲んでくれ」

「拒否したら……？」

「セインが言ってなかったかい？
改造するよって」

「飲ませていただきます」

別に改造されるのが怖いわけじゃないからな？
カプセルを飲む。

苦い、甘い、辛い、酸っぱい、やばい。

口から出したい。

味覚が死にそうだ。

「どうだい？」

即効性のはずなんだが……」

「……うん、効いてますよ」

スッゴク」

普通に痛みが引いた。
味覚が死んだ気がするがね。

「じゃあ早速始めようか
先に訓練場に行つてくれ
あとこれも忘れずにね」

手袋君とリストバンド君を渡されたオレは、のんびり歩いて訓練場に向かった。

途中セインに捕まって訓練場まで移動させられたのは内緒である。

「さて、実験を始めようか千秋
実験といつても起動実験のようなものだから、危険な実験ではないから安心してくれ」

「イエッサー、ドクター」

なんとなく敬礼してみる。

「では最初はAMFから実験しよう
AMF、アンチマギリンクフィールドというんだが……
『魔力の結合を妨害し、魔法を無効化する領域』と言えばわかりやすいかな？」

この領域では攻撃系魔法はおろか、防御魔法、移動魔法ですら無効化できる

君の得意な格闘戦に持ち込みやすくなるだろう」

得意な訳ではないんだがなあ……。けど、なんとか理解できる。

「ただし、魔法に強い反面、物理的攻撃には何も効果はないし、全ての魔法を防げる訳ではないんだ」

「じゃあ極力避けると？」

「そういうことになるね」

厳しいっての……。

「まあ、あくまでも護身用だからね」

「護身用としては十分ですね」

なんとかなるさー。

「AMFの効果範囲は君を中心に最大10m
10mまでなら範囲を自由に決めることができる

ただし、一度AMFを起動すると、起動中に範囲を変えることはできない」

「えーと、つまり……」

一度5mでAMFを起動すると、AMFを停止させないとずっと5mのままってことですか？」

「そういうことだね」

……さらにキツくなった気がする。

「ちなみにAMFはガジェット達にも装備されているから」

「ガジェットって、何ですか？」

「ん？」

君は見なかったかい？

青いカプセルみたいな機械を」

……アレ、ガジェットって言うんだ。
初めてここに来た時以来見てないな。
アレっていつもどこにいるんだ？

「ホラ、ちょうどあそこに」

「え？」

ドクターがオレの後ろを指差したので見てみた。
うん、いた。

なんか機材を運んでた。

あと頭（？）にダンボールかぶってるのもいた。

しかも動きが若干遅い。

某蛇の人みたいだ。

「ああ、更に言うと

アレらはみんな、君の言うことを聞くから」

「マジっすか……」

「さて、千秋
準備はいいかい？」

「え、あ、はい
OKです」

ドクターがオレから離れる。
いつの間にかウーノさんもいた。
空中に出てるキーボードを叩いてる。
ウーノさんは変わらずスーツのままだった。

「じゃあ始めようか
千秋、前を見てくれ」

ドクターが言うように前を向くと、そこには丸い機械が六機、バラ
バラの位置で宙に浮いていた。

「それは魔力弾を放つ機械だ
発射のタイミング、弾の速さなどは、ウーノの気分で全て変化する
だがまあ、今は一機一発ずつ撃つのだがね
じゃあ千秋、AMFの範囲を1mで起動してくれ」

1mで起動ね……。
アレ、そういえば……。

「起動ってどうやれば……？」

「ああ、言ってなかったね
『AMF起動』言えばいいだけだよ」

そうすれば君の音声を認識してAMFが起動する
範囲指定もその時に言えばいいよ」

なんとまあ、ひどく簡単な。

「あとは何もないね？
では始めよう、ウーノ」

「はい」

ウーノさんがEnterキーみたいなのを押すと機械が一斉に空中
で動き回りだした。

「千秋、AMFを」

「AMF起動、1m」

オレの周りに薄い膜が現れる。

前方の機械が黄色い弾を撃ってくる。

黄色い弾は膜にぶつかってかき消されていく。

次は右後方と左前方から。

これも同様にかき消されていく。

残りの三機も一斉に撃ってくるが

全てかき消される。

へー、こんな感じなのか。

「千秋、やり方はわかったかい？
本当はコレを逃げながらやらなければならぬのだが大丈夫かい？」

「……うん
大丈夫だ、問題ない」

「わかったよ
では次はリストバンドだが……
一度リストバンドの調整をしたいから渡してくれ」

「了解」

オレはA M Fを解除して、ドクターにリストバンドを手渡す。

「では、少しここを空けるよ
ウーノと世間話でもしててくれ」

ドクターはそのまま訓練場を出ていく。
訓練場にいるのはオレとウーノさんだけになった。

「どうですか？
ここでの生活は慣れましたか？」

ウーノさんが話しかけてきた。
ビックリした。

「ええ、おかげさまで
不便なく生活できてます」

「そうですか
妹達も千秋さんがここに来てから、今までより笑顔を見せるようになりました」

マジで？

元からじゃなくて？

「楽しいんでしょうね

千秋さんが来てから

ウェンデイが言ってませんでしたか？

『新しく兄ができたようだ』と」

「ああー……」

言っていましたね、そんなこと……」

イマイチ実感がないけど。

……そうだ、一応聞いところ。

「あの、ウーノさん聞きたいことがあるんですが……
管理局にいる地球出身者って、一体誰なんですか？」

「……聞きたいのなら教えますが、名前だけですよ？」

名前だけ、か……。

まあいいや。

どうせ知らない人だろうし。

「ええ、お願いします」

「……わかりました

その人の名前は……」

「待たせたね、千秋
では次は飛行テストを始めよう」

「……」

「……千秋、聞いてるかい？」

「あ、は、はい……
聞いてます……」

ならいいよ、とドクターはオレにリストバンドを渡してきた。

「千秋、それを着けて『展開』、と言ってみてくれ」

「はいよ」

リストバンドを左手首に着けて、軽くリラックスした。

……さっきのウーノさんの話は一旦忘れよう。
今は実験に集中……！

「展開」

そう言っただけで直ぐに背中に違和感を感じた。
背中を見ると、まるで噴射しているような形の青い翼が背中にでき
ていた。

「気分とノリでそんな風にしてみたんだが、どうだい？」

「……いや、その、何と書いていいかわからないと言いますが、気分とノリでこんな作るドクターは何なんだっていうか……」

「科学者だが？」

「いや、そういう訳ではなく」

「とにかく、それよりも早く飛んでみてくれないか？
ある程度のデータは欲しいのでね」

そうは言うが、これってどう飛ぶんだ？

「君が思った通りに飛んでくれるよ
さあ、早く飛んでくれ」

ハリー（早く）、ハリー（早く）！

なんかテンションがおかしくないか、ドクター？
てか思った通りにか……。
とりあえずゆっくり浮いて……。

「うおっ！？」

本当に浮いた。

本当にゆっくり上に浮いてる。

「起動テストは成功だね
では千秋、好きなように飛んでみてくれ」

「好きなようにって……」

どう飛べと……？

えっと……こんな感じか？

思った通りに動くとドクターは言ったが過敏過ぎる。

確かに思った通りに動いてくれたけど、多分狭すぎたんだなココが。壁にぶつかって床に落ちた。

そこで意識がぶっ飛んだ。

「……い」

あはははは、よいではないかよいではないか。

「……お……きろ」

ちょ、トーレさん、腕はそっちにまがらないいいいいい。

「……だこ……！」

……せ！」

柔らかいなあ……この抱きまくら。

「……せっ！

…の、離せ！」

「どへっ！」

痛い。
後頭部が痛い。
誰だ殴ったの。

眼を開けると真っ暗だが凄く柔らかい。
少し上を見ると短い髪と気の強そうな顔の女の子がいて、オレはその娘に抱きついていた。

そう、その女の子はノーヴェだった。
顔を真っ赤にしている。
うん、可愛い。

「早くっ……！」

拳を振りかぶるノーヴェ。
あ、ヤバイ。
これはマジでヤバイ。

「離れろおおっ！」

「ぎゃぶっ！」

いいパンチだ、ノーヴェ。
悔いはない、男子として。

「は、早く、め、飯作れ、このバカ千秋！」

顔真っ赤のまま訓練場から出ていくノーヴェ。
てか飯……？
もうそんな時間か……。

なんか忘れてるような……。

「あ、食材……」

食材が切れそうなのを忘れてた。

……殴られないのを祈ろう。

…おまけ、みたいなもの…

「ドクター、何故あの場に千秋さんを放置したんですか？」

「彼のデータからリストバンドとグローブの修正をしなければいけないし

それにこれらの名前も決めないといけないしね」

「名前、ですか？」

「ずっとそのままリストバンドとかだと申し訳ないだろう？」

君達のISのようにこれらにも名前をつけようと思ってね……」

「そうですか……」

（しかし、アレを教えた後の彼の表情が少し変わったような……
気のせいでしょうか？

『高町なのは』と『八神はやて』、地球出身ではないですがこの二人に深い関係のある『フェイト・T・ハラオウン』と関わりがあるとは思えません……

まあ、今度直接聞いてみましょうか……（

「で、ウーノ

どんな名前がいいと思う?」

「空飛ぶリストバンド君と、AMF手袋君……」

「OKわかった

私の方でも考えましょう」

第五章・実験、開始（後書き）

作者「空飛べる、AMF装備の上に格闘タイプ……」

千秋「どうしてこうなった？」

作者「いやぁ……」

何と言いますか……

一種の気の迷い？」

千秋「何か色々と変になった気がするが大丈夫か？」

作者「大丈夫だ（多分）
問題ない（多分）」

千秋「本当に大丈夫か、この作者……」

作者「ではまた、次の話で会いましょう」

千秋「逃げたな……」

第六章・お出かけと出会いと再会と（前書き）

作者「本当に申し訳ありませんでした」

千秋「約一ヶ月と一週間か……」

作者「テストって辛いですね」

千秋「余裕がましてた自分を恨め」

作者「言い返せない……」

千秋「では久々に更新した第六章をお楽しみください」

第六章・お出かけと出会いと再会と

なんということでしょう。

食材が今日の晩御飯の分までしかない。
というわけで……。

「食材を買いにクラナガンに？」

「行きたいです

てか、行かなきゃいけないんです」

食材がないと知ったあの人達が何をするかわからないし、実際に都市部に行ってどういふところか見てみたい。

ちなみに都市部の名前がクラナガンというのは今知った。

「フム、君には家事を任せているしね……

わかった、今から転送装置を用意しよう
1時間ほど待っててくれ」

ドクターはそう言つと部屋奥に行つてしまった。

まさか今から作る気が、ドクター！。

スゲーな、アンタ……。

「じゃあ今のうちに晩飯作つとくか」

（50分後）

「……てなわけで
電子レンジで温めれば食えるから、晩飯のことは頼んだぞ」

「了解した」

「うん、わかった」

チンクとディエチが返事をする。
ちなみにこの二人は普段着ではなく『アレ』である。
どうやら訓練後だったようだ。

「千秋、そろそろではないのか？」

「ん、ああ、みたいだな
じゃあ行ってくるから頼んだぞ」

「行つてらっしゃい」

ディエチが手を振ってる。
うん、無表情。

「さて、千秋
この中に入ってくれ」

ドクターの隣にはデカイ機械があった。

「ただ入るだけっすか？」

「ああ、座標指定とかはこちらでやるから大丈夫だよ
あとお金だ」

ドクターから渡されたのは札束……札束！？

「金額のことは気にしないでくれ
家事を担当してくれるお礼だよ」

ドクター、太っ腹すぎ。

ドクターに感謝しながら機械の中に入る。

「千秋、手袋とリストバンドは持ったかい？」

「ええ、持ってますよ」

ポケットから二つを取り出して見せる。
向こうに着いたら着けよう。

「よし、ならいいね」

じゃあ、クラナガンに転送するよ」

「了解」

返事をした瞬間、一瞬意識が飛んだ。
その一瞬の間にドクターの部屋から景色が変わった。

……路地裏みたいだ。

とりあえず路地裏を出よう。

「……近未来都市？」

第一印象がそれだった。

ビル、人、ビル、人、ビル……。

大都市すぎる。

「これがクラナガンか……
で、あのデカイ建物が……」

時空管理局……。

「……つと、そんなことより買い物しないとな
しっかし、人が多くて迷いそうだな」

適当に歩いたら絶対迷うな、コレは。

「だから適当に歩こう」

レッツゴー。

「ご、ごめんなさい！
ホラ、アンタも謝る！」

「ごめんなさい！

「ごめんなさい！」

「いや、気にしなくて、いいから……」

角を曲がった瞬間にワイシャツにアイスをぶちまけられるという。
しかも相手がおにゃの……、もとい同年台の女の子だったから怒るに怒れない。

そして冷たい。

カシヤツ。

「『目の前で同年台の女の子が必死に謝ってるんだが……』 っと……」

「えつと、何を……？」

目の前で謝ってる青いショートヘアの女の子が顔を上げる。

「ん？」

今の君の状況を写真撮って、ある掲示板に貼ったんだけど……」

「ええっ!？」

い、今すぐ消してください!」

「大丈夫、掲示板なんかないから」

「よかった……」

安堵する女の子。

「まあ写真はまだあるけど……」

「写真も消してください!」

詰め寄ってくる青髪の女の子と、それを見て苦笑いするオレンジ髪の女の子。

いやあ、楽しいねえ。

「はいはい、消しますよつと……」

もったいない……。

しかしどっかで見たような顔だなこの娘……。

「いやあ、それにしても冷たいなあ……」

「う、ごめんなさい……」

「あの、ケガとかないですよね……?」

「うん、冷たいだけだ」

「う……」

いやあ、楽しい楽しい。

「まあ、気にしないでいいよ
んじゃ、急いでるから」

「あ、待って……!」

オレは足早にその場から離れた。

何て言うか……、なのはさん達みたいに絡んで来そうというか……。
決して面倒というわけではないからな。

さて、デパートを探そう。

気を取り直して、レッツゴー。

「どうしてこうなった」

デパートには行けたよ？

行けましたよ？

けど買い物が終わって、気づいたら公園みたいなところに着いた。
いや方向音痴じゃあないし、夢遊病でもないですよ？

……それよりも荷物が多いから一旦座りたいね。

両手に4つずつ買い物袋持つのはキツイ。

座れる場所は、っと……。

「ん、あの子たちは……」

赤い髪の男の子とピンクの髪の女の子と一緒にベンチに座っていた。
デートか、デートですか。

見せ付けてくれるなあコノヤロー！

……頼んでみるか。

「スマン、そこのお二人さん」

「あ、僕たちですか？」

「ああ、隣に座ってもいいか？
荷物多くてね」

「あ、はい、どうぞ座ってください」

赤い髪の子が女の子の方に寄って、スペースを空けてくれた。

「ありがとうございます」

ベンチの空いたスペースに座って買い物袋を足元に置く。
重かった……。

「重そうですね……
大丈夫ですか？」

赤い髪の子が心配そうに聞いてくる。

「ああ、大丈夫だよ
食材だけでこんなになるとは誰も思わないだろうな……」

「そんなに食べるんですか？」

今度はピンクの髪の子が聞いてくる。

「世話になってる所が結構な大人数が住んでてね
オレが食事係になったから買い出しに来たんだよ」

「あはははは……」

こら少年、苦笑いすんな。

そんなことを考えてたら着信音みたいな音になった。
どうやら少年の腕時計から聞こえてるみたいだ。
高性能な腕時計だなあ。

「はい、こちらライトニング3」

ライトニング……？

コードネーム的な何かか？

『はい、こちらスターズ3
そっちの休日はどう？』

『ちゃんと楽しんでる？』

どこかで聞いた声だな。

ついさっき会ったような声だな。

嫌な予感しかしねえぞ。

……やってみるか。

「少年少年」

「はい……？」

「話し相手に……って言うてみてくれないか？」

少年に耳打ちして頼んでみる。

「あ、はい……」

えっとスバルさん」

『なに？』

さあ、どうなる……？

「『さっきのアイスで汚れたワイシャツのお返しにあらぬ噂を広めておいたからな b y被害者の男性A』だそうです」

（ズルッ、ドサッ！）

コケたな……。

『エ、エリオ！

どういうこと！？』

「いえ、僕にもよく……」

「さっきのは冷たかったし、下に着てるシャツにも甘い匂いが染み付いてんだよなあ」

わざとらしく、やや大きめの声で言ってみる。

『あつ、その声！

さっきのワイシャツさん！』

「変な名前付けるなよ『アイス娘スバルちゃん』？」

『だって名前わかんないんですもん……
あと、私はそんな変な名前じゃありません!』

「へー、そうなんだ」

『聞く気ないですね……』

失礼な。

「えっと……」

「スバルさん達の知り合いですか？」

「ついさっき知り合ったばかりだから知り合いと言えるんだか……」

そこまで言うといきなり着信音が鳴り出した。

あ、オレの携帯か。

……ドクターから？

「もしもし」

『やあ、千秋

いきなりで済まないが、少し頼まれてくれないかい?』

「ええ、別に構いませんけど……」

どうかしました?」

『探して欲しいものがあるんだが……』

「探し物？」

『レリックだよ』

レリック？

それって確か……。

「それって、ドクターが欲しがってるっていう……」

『そう、以前説明したロストログアのレリックだ
その反応が二つ、クラナガン付近にあるんだ
片方はそちらに近づいている』

近づいてる？

『君の携帯でもレリックの反応を見れるはずだ
買い物袋はどこかに適当に置いてくれて構わないよ
あの娘たちの誰かが持って帰るから
それじゃあ頼んだよ』

ドクターはそう言って通信を切った。
荷物は適当につて……。

「ここは流石にな……」

「どうかしたんですか？」

「ん、ああ

ちよっと探し物を頼まれてね」

「手伝いましょうか……?」

ええ子や……。

「いや、いいさ

オレの仕事だし

気持ちだけ受け取っておくよ」

オレは荷物を持ってその場を離れた。

さて、どこに置こうかな……。

「ここでいいかな」

クラナガンに着いたときの路地裏に荷物を置いて携帯を開く。

なんか『レリック』と読めなくもない名前のファイルがあり起動してみた。

「これ……クラナガンの地図か?」

画面にはクラナガンの地図と赤い点が二つ。

片方はその場で止まっており、もう片方は動いている。

おそらくこれがレリックなんだろう。

「さて、行きますか……!」

オレは携帯を片手に赤い点のある地点に向かって走り出した。

第六章・お出かけと出会いと再会と（後書き）

千秋「オチは？」

作者「この話は二部構成です
下手すりゃ三部くらいになりそうだけど」

千秋「二部目はどうなってる？」

作者「まだ途中ですね、ハイ
そろそろ夏休みですし
自動車免許も取らないとダメだし……」

千秋「……まあガンバレ」

作者「ハイ
ではまた次回」

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのに（前書き）

作者「長らくお待たせ致しました」

千秋「ホントにな
で、ちゃんと免許取ったよな？」

作者「ええ、取りましたよ
ちゃんとね」

千秋「そりゃあよかった」

作者「では第六章そのに
お楽しみください」

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのに

…??? side…

私には憧れの人がいる。

四年前の空港火災のときに私を助けてくれた人。
黒髪ですごく優しい顔をした男の人。

その人は私を助けたあと、通路の崩壊に巻き込まれていなくなってしまった。

私をかばうように……。

その時、私はその人のペンダントを引きちぎってしまった。

……今でもそのペンダントを持っていて、肌身離さず着けている。

いつか返せる日が来ると思うから。

私は先程、ある事故現場に向かった。

横転したトラック、怯える運転手、散らばった輸送物、生体ポッドと何かを引きずったような痕跡……。

嫌な予感がする……。

そう思った矢先に父さんから連絡が入った。

『レリックと要救助者の5〜6歳程の少女が見つかった』と。

5〜6歳くらいの少女という単語にひっかかり、機動六課の任務に同行することに決めた。

私が向かった現場にも関係がありそうだから……。

『それじゃあナカジマ陸曹、詳しく聞かせてくれへん？
そっちの事故のことを……』

そして私は今、機動六課の八神はやて部隊長に説明をしている。

ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドについて……。

その生体ポッドがちょうど5〜6歳の子供が入るくらいの大きさだったことも。

地面に重いものを引きずった跡があってそれを追っていたということと話した。

そしてその生体ポッドが前の事件で見た『人造魔導師計画の素体培養器』であることもわかった。

発見された子が人造魔導師の素体として製造されたのかも、という推測もできるがそれは置いて……。

私は相棒『ブリッツキヤリバー』と共に地下水道を走っていた。

その時、

「おわっ！」

「きゃあっ！」

急に構造から飛び出してきた人と衝突してしまい、その人の体の上に倒れ込んでしまった。

その時、私はどこかを感じたぬくもりを感じた。

父さんや母さんとも違う温かさ……。

私は顔を上げてその人の顔を見る。

「いてて……」

見間違えるはずがない。

その人は、

「えっと……」

その人は、今も変わらない顔で、

「おい、大丈夫か？」

あの時と全く同じ格好と全く同じ台詞で私の下敷きになっていた。

…千秋 side…

えっとですね。

ドクターからの協力要請が来て、反応があつたところに行っても何もなくて（ここまでで10分）。

ドクターから、『マンホールから地下水路に行ってくれ』っていう指令を受けてマンホールを探して（ここまでで10分）。

そして、丁字路（？）に出たところで女の子と衝突。

女の子に押し倒されている状況です。

どこから『もげろ』てか聞こえて来るが気のせいだろう……。

「チアキ……さん……？」

「そ、そうですけど……
どこかで会いましたっけ？」

確かに見たことあるようなお顔をなさってますけど……。

ポタツ。

頬に水が落ちた。

目の前の子が泣いてた。

「え、ちょ！？」

なんで泣くんだよ！？」

オレなんかしました！？」

女の子を泣かせるようなことはしたことないぞ！？」

「え、え？」

なんで、ぐすつ、私泣いて……」

「いいから早く涙拭いて！
ケガとかはないよな！？」

これ謝ったほうがいいか？
そうだよな？

そのほうがいいよな？

「ぐすつ、私のこと、覚えてないんですか？」

覚えてないのかって……。
えーと……。

「覚えて、ないんですね……」

「えっ!？」

えと……「ごめんなさい……」

思い出せませんでした……。

「そう、ですか……」

ごめんなさい。

心の中で謝ったあと、彼女の首にぶら下がっているものを見た。

あれ？

このペンダントって……？

「……!？」

ここから離れて下さい!」

「え」

彼女が急に立ち上がって向こうを見る。

彼女が見ている方を見るとその奥からガジェットの皆さんがこつちに向かってきていた。

ドクター……。

ナイスなのか、微妙なのか……。

「早くここから離れて下さい、チアキさん!」

……いけつてことか、ドクター。

「早く行ってください!」

「……わかった」

オレは彼女とドクターに礼を言って、この場を離れるようにレリックの反応がある方向に走った。

携帯によるともつと奥の方にレリックがあるようだ。

先のT字路を左か……。

T字路に差しかかったところで右側に人影が見えた。四人組でどこかで見た髪の色をしていた。

……とりあえずは無視安定だな。

「あ、ちょっと待ってください!」

「そっちは危険です!」

危険なのは承知なんだけどな……。

無視無視。

オレはそのまま奥まで走った。

後ろで呼ぶ声が聞こえるが気のせいだろう。

走り続けて着いたところは下水道の終着点のようだった。レリックはここどこかにあるようだ。

「さて、探しますか」

「ちょっと、待ってください!」

「ん？」

ああ、さっきの子達か
何、なんか用？」

『アイスぶちまけ少女スバルちゃん』ご一行じゃないですか。
てか……。

「何その格好、コスプレ？」

「コス……プレ……」

オレンジ頭と『アイス以下略』が落ち込んでる。

「まあ、いいや
えーと……」

確か黒いケース、だったよな？
……携帯も開いたところ。

「こつち、か」

じゃぶじゃぶと水の上を歩いてまっすぐ歩く。
靴の中に水が入ってくる。
気にしない気にしない。

「お、これか？」

水の中に半分沈んでる黒いケースを引き上げる。
ん、これっばいな。
やっと見つけたよ……。
さて、帰りますか。

「あ、あの！」

「ん？」

ピンクの髪の子がいつの間後ろにいた。
近くに白い生物が浮いてる。
あれ、さっき会ったときいたっけ？

「何？」

「それをこっちに渡してくれませんか？
それ、危険なもので……」

「ふーん」

もしかして、この子ら時空管理局の人か？
そうじゃなくても、ただ従うつてもなんか嫌だな……。

「やだ、って言うたら？」

「え、えつと……」

「無理矢理奪うのか？」

「え、いや、そうじゃなくて……」

……まだあの人達みたいじゃない分マシかな？

あの人達は話を聞いてもらうよりは話を聞かせるだからな……。

特になのはさんの場合は恐ろしいからな。

それは置いて……。

どうしよつかねえ……。

……覚悟決めますか。

「じゃあ嫌だ、渡さない」

「えっ」

「じゃあなー」

ケースを脇に抱えて、さっきの通路までゆっくり歩き出す。

突然何か首に当たった。

オレンジ色に発光したナイフっぽいもの。

「悪いですけど、そういう訳にはいかないんです」

オレンジ頭の子だった。

これなんて脅迫。

「怖っ」

正義の使者が脅迫か」

「……これは脅迫じゃありません」

「ナイフを首に当ててる時点でそのセリフに説得力全くないよな」

「……っ！」

やべ、これって挑発になっちゃってる？

とか思ってるの上の方に小さい赤い光が見えた。

炎、みたいだな。

……もしかなくても、アレこっちに向かってきてるよな？

オレはとっさに目を瞑った。

やや近くで爆発音が鳴り響いた。

目を開けると首に当たっていたナイフがなくなってる、周りは煙だらけ。

一体誰が？

「おい、お前！」

目の前に小っちゃい女の子が出てきた。

うん、ホントに小っちゃいんだよ。

ワタシウソイワナイヨ。

「早くそれ持ってこっから離れろ！
アタシ達がここに残るから！」

『達』？

「でやあっ！」

スバルが殴りかかってくる。

うん、ボケてる暇じゃないな。

オレのそばを『何か』が高速で通りすぎてスバルを吹っ飛ばす。

「うああっ！」

オレの前になんかカッコイイフォームの鎧を着けた人が現れる。

「ホラ、早く行け！」

「……あんがとさん」

オレはケースをしつかり抱えて、さっきの通路を走った。

「待ってください、チアキさん！」

「この人のこと忘れてた……」

さっきオレを押し倒した女の子に追いかけられている最中です。

全力疾走だけであっちはローラースケート。

しかもブースターっぽいのも着いてる。

まあ、速さで勝てる訳はなく、

「捕まえました！」

「ギャース！」

抱き着かれる形で捕獲されました。

「ええい、離せ！

離しなさい！

いや離してください！」

「いいえ、離しません！

話を聞いてもらうついでに、そのケースも渡してもらいます！」

レリックをついで扱い！？

何この人怖い！

誰か助けてください……。

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのに（後書き）

千秋「この話は二部構成って言ったじゃないですかぁーっ！」

作者「書いてたらこうなりました
多分次で終わるから我慢して」

千秋「いやもうほんとお願いします」

作者「切実ですね

女の子に抱き着かれるのがそんなに嫌かコノヤロー

もげろ」

千秋「元はといえばアンタのせいだろ」

作者「知りません

気のせいです気のせい

ではまた次回でお会いしましょう」

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのさん（前書き）

千秋「遅い」

作者「すいません」

千秋「約一ヶ月か」

作者「すいません
待ってくれていた方々、すいませんでした」

千秋「で、理由は？」

作者「来週テストです」

千秋「そんな状況で書いたのか
馬鹿か」

作者「実際出来ていましたが
勉強に追われていました」

千秋「誠に申し訳ございません
この作者のせいで」

作者「そのせいか
ちゃんと纏められているかが謎」

千秋「ちょ、おま」

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのさん

「さあ、話を聞いてもらいます
それと話を聞かせてもらいます
それとレリックも渡してもらいます」

「拒否できます?」

「そんな権利あると思います?」

恐いんですけど。

「逃げたら?」

「足を折ります」

「わかりました、話を聞きましょう」

足折られるのが怖い訳ではありません。
断じて。

「で、話って何さ?」

「……四年前の空港火災を覚えていますか?」

空港火災?

「火災?」

いや、この世界に来たのつい最近だから昔のことはわからないんだ

よな」

いや、待てよ……？

「確かそんな夢をつい最近見た気が……
で、女の子を助けてたような……
何て名前だったかな、あの子……？」

「ギンガ・ナカジマ」

「あ、そうそう
確かそんな名前……
って何で知ってたんの？」

この人何なんだ？
何でオレの夢に出てきた子の名前を……？

「だって

私とそのギンガ・ナカジマですから」

……は？

「あゝ、えっと……
どゆこと？」

「あなたは四年前、今と変わらない姿で私を助けてそのままいなくなっ

そしてあなたは私の目の前にいて、あの時のことを覚えている」

ギンガは首にかけているペンダントを外した。
ロケットペンダントだ。

見たことがあるどころか、忘れてはいけな大切なもの。

「あなたがなくなる直前に私が引きちぎってしまったペンダント
……

『あなたのペンダント』です」

まさか、とは思った。

夢から覚めた時に思ったこと。

今考えていることは、その時に全く同じこと。

「あれは、本当に起きたことだったのか……」

「……私はあなたにお礼が言いたかった。
これもずっと、あなたに返したかった」

ギンガはペンダントを握りしめる。

「……じゃあ返してくれ
オレにとっちゃ、それは大切なものなんでな」

「できません」

キツパリ断られた。

「なんでだ？」

オレに返したかったんじゃない……」

「交換です」

あなたの持つレリックと、このペンダントを」

究極の二択。

どうしよう……。

…ギンガ side…

「さあ、レリックをこちらに渡して下さい」

チアキさんのペンダントを持ちながら、レリックを渡すように催促する。

見る限りでは悩んでいるように見える。

でもこの人はきっと渡してくれるはずだ。

この人が悪人だなんて私は絶対に信じない。

「……めん」

「はい？」

チアキさんが何か言ったようだが聞こえない。

「どうかしましたが、チアキさん？」

そばに近づいてもう一度聞き返す。

「ごめんな」

とっさのことに反応できなかった。

チアキさんは私の手からペンダントを取って、私を突き飛ばした。

「キャッ!？」

私は水路に落ちて尻もちをつく。

「痛たた……」

顔を上げてさっきのところを見たけど、そこにはもうだれもいなかった。

レリックもチアキさんも。

…千秋 side…
「危ねー……」

ギンガが持っていたペンダントを取って、突き飛ばして素早く逃げた。
めっさ恐かった。

今は全力疾走で来た道に戻っている。

レリックを片手に、ペンダントはポケットに閉まっている。

「あとのくらいだっけ……？」

急いでたから、この辺の道をほとんど忘れてしまった。
早くここから出たいのに。

「あ、梯子」

心の中で愚痴ってたら梯子を発見した。
なんとまあ、運がいいんだか悪いんだか。
そしてここで問題発生。

「どうやって登ろう……」

片手で登れるかな……。
レリック結構重いんだよな。
どうしたもんか。

「うーむ……」

ポク

ポク

ポク

チーン。

「飛べばいいじゃん」

ドクター作の飛行アイテムがあったじゃん。
気づいてよかった……。

「よし……」

『展開』」

起動コードと同時に、背中に青く噴出する翼が現れる。
……今更だけど、翼って言えるのか？

まあいいか。

「よっ、と」

ジャンプと同時に宙に浮く。

浮くっつーか飛ぶ。

そのままマンホールのフタを開けて外に出る。

「まぶしっ」

すげーまぶしー。

ここどの辺だ？

「えーと……」

あの公園は確か少年達と会ったところだな」

公園近くの路地裏ね……。

うん、どこだよ。

とりあえず逃げよう。

あの四人組なら簡単に逃げれそうだからいいけど……。

あの人達来たらヤバいんだよな……。

あいつらが来るまで逃げ回らないとな。

「さて、いくか」

「どこに行くつて？」

周りの物が壊されて煙が舞う。

「うわっ、ぷ！」

とつさに顔を隠して目に木片が入るのを防ぐ。

「げほっ、げほっ！」

むせる。

すっごくむせる。

さっきの声……、どこかで聞いた声だった。

子供のくせに、チビのくせに妙に大人ぶってた赤毛のチビに似ていた。

上を見上げる。

赤いゴスロリチックな服を着た赤毛の少女がハンマー片手に宙に浮いていた。

懐かしい顔だ。

「なんで……」

なんでだよ……」

口を開いてワナワナと震え出す少女。

「よう、久々だな」

オレがそう言つと足音が近づいてくる。

「副隊長！」

さっきの四人だった。
とりあえず無視だ。

「いやホント、お前は何も変わってねーな」

「なんで、お前がここにいるんだよ……！」

オレと奴が同時に口を開く。

「ヴィータ」

「千秋！」

オレはやや余裕に、ヴィータは怒気を噴くんだ声でお互いの名前を
呼び合った。

できることなら会いたくなかったなー、こいつとは。
参ったね、どーも。

「ヴィータ、副隊長？」

さっきの四人組の動きが止まる。
同時にヴィータも下に降りてくる。

「ヴィータちゃん！」

ヴィータの近くにちっさい女の子が飛んでくる。

この子も見ただことあるな……。
たしか……。

「リイン、だったつけ？
なんでそんなちっさいんだ？」

「……千秋さん
どうしてここにいますか？」

「……やっぱりみんな驚くんだな
さっき会ったギンガもそうだったし」

なんでかねえ。

「ギン姉と会ったんですか！？」

「会ったよ」

逃げてきたから今頃は追っかけて来てると思うけどとお！

ヴィータよ、話の途中で殴り掛かって来るのはやめよつぜ……。

「千秋、それを大人しく渡せ……」

そうすれば……」

「そうすれば？」

「連行だけで済ませてやる」

「そう言いながらハンマー構えんのやめてくれない……？」

本当に恐いから。

だけどなあ……。

「悪いけどこれは渡せねーんだ
お前でもな」

「……だったら、力ずくでもわたしてもらっぞ千秋」

やべ、こいつのこの顔は

本^{マジ}気だ。

「遠慮しときますわ

『展開』」

翼を出して空を飛ぶ。

トンスラしましょう。

そうしよう。

一対六（リイン含む）はムリだ。

「なっ、待て千秋！」

「待てって言われて待つ敵がいるか！」

「待ちやがれ！
このおっ！」

うわっ、ヴィータも飛んできた！
逃げ逃げっ！

「待てえっ！
このバカ野郎！」

「誰が待つかっ！」

「じゃあ止まってもらっよ」

「え」

突然桜色の光が道を遮る様に現れた。

「どわっ、とお！
な、何だぁ！？」

光の直前で停止する。

ストレスだ。
危ねえ。

「千秋くん……」

上から声が聞こえる。

一発で理解した。
声で一発でわかつちった。

「まさか、アンタまで来ますか

なのはさん」

上にいたのは、オレの先輩。
白いローブ（？）を着て、杖を持った高町なのはがオレを見下ろしていた。

「千秋くん、それをこっちに渡して！」

「イヤです」

キツパリ言ってやったぜ！
ハハッ！

「でも……
それはとても危険なもので」

「そんな危険なものを持つてる人を撃つたなのはさんも充分危険ですけど？」

「それは……」

「スキあり」

猛ダッシュ。

空中を飛んでるからダッシュとは言わないとか気にしてはいけない。
しかしその考えが甘かったようで。

「遅いよ、千秋くん」

金色の何かが目の前に突然現れた。
手に柄の長い斧を持った金髪の女性。

「久しぶりだね、千秋くん」

「フェイトさん……」

「アンタも来ますか……」

もう一人の先輩、フェイトさんが道をふさぐように立ち塞がった。

後ろにはなのはさん、ヴィータ、四人組。

前にはフェイトさん。

囲まれた……。

マジでどうしよう……。

第六章・お出かけと出会いと再会と　そのさん（後書き）

千秋「なんかなあー」

作者「そう思いますよね」

千秋「タイトルの再会ってこれのことか」

作者「まあそうですね」

千秋「でもなんかしっくりこない」

作者「このあとにはやてさんも出そうかなと考えました」

千秋「なぜ書かなかった」

作者「今出ているキャラを全員動かせなくなるので止めました
今回も結構無理してます」

千秋「アレが限界か」

作者「実際

フォワード四名はいなくても良かった気がする」

千秋「ヒデーな、おい」

作者「次も絶対更新します
待っててください」

千秋「本当にお願いします」

第七章・撃墜（前書き）

千秋「どんどんペース落ちてないか？」

作者「精神的にダメージとかひどい」

千秋「なんかもう理由聞くの嫌になってきた」

作者「話すのも嫌になってきた
最後まででは書くけど」

千秋「それを普段の生活にも活かせよ」

作者「サアハジマリマスヨ」

千秋「こいつ……」

第七章・撃墜

「どうしても、渡してもらえないのかな……？」

フェイトさんがやや遠慮がちに聞いてくる。

この人達は何回同じ質問するつもりなんだか。

「渡しませんよ

しつこ過ぎませんか、あんた方は……」

「千秋君がそれを渡してくれるまでは何回も言うよ」

「いや、さつきヴィータにも言いましたけど……」

武器持ちながら言われても説得力がないんですって」

そんなんで言うことを聞けって言われてもなあ……」。

「さつきのなのはさんみたいに、ロストロギア……だったっけ？

そんな危ないものを持つてる奴を打ち落とすことがあんた方のする仕事なんですか？」

正直さつきの怖かった。

冷やっとしたね。

「それは……」

「あんた方が『何を犠牲にしても』こんなことをする人達なら何も言いませんけど……」

あ、あと聞きますけど」

「何、かな？」

いきなり話を振られたからか、フェイトさんが物凄く戸惑っている。何、気にする事はない。

「こんなに話してて隙だらけなのに、コレを奪いにこないってどういうことなんすか？」

コレ、と言ってオレはレリックを指差す。

この辺りの時間が止まったかのように、みんなピタリと止まった。

意外、だったのか……？

よし、逃げよう。

逃げるが勝ちだ。

「レッツ、エスケープ」

その場から猛スピードで飛んで逃げる。

「あっ！」

「待つて千秋くん！」

後ろからなのはさん達が追い掛けてくる。

やべえ、速い。

正直なめてた。

とても振り切れなさそうだ。
って冷静になってる暇じゃねえな。
どうしたもんかね。

テーレツデー♪

電話？

てかいつの間に世紀末な着信音に？

……ドクターの趣味か？

「もしもし、ただいま逃走中の椎名千秋ですが」

『軽い冗談を言えるくらいの余裕はあるみたいねえ、千秋ちゃん？
それくらい余裕なら助けはいらないかしらあ？』

「助けてください、クアットロさん
助けてあげてください、クアットロさん」

相手はクアットロさんだった。
てか今の状況を知ってるってことは……。

「もしかして近くで見えます？」

『あらあ、わかつちやう？』

千秋ちゃんにモテ期が訪れたみたいねえ♪
たくさあんの女の子に追い掛けられてるのがまる見えよお？

ホント、妬ましいわあ……」

「いや、あの……」

本当に助けて下さい、冗談抜きで」

実はこの会話の中で二回ほどレーザー撃たれてます。恐いんです。

『しょうがないわねえ……』

その子達に対してただ真っ直ぐに逃げたらダメよお？
ビルの谷間を飛び回ったほうがいいわよお？

まあ、こっちからでもできる限りの援護はするけどねえ』

「マジっすか」

『今からデータを送るからその場所に行きなさい
小さくてかわいい協力者さんがいるわよお？』

「あの、別にオレはロリコンじゃないんですけど……」

でも、ひとまずはそこに行くしかないか。

「了解しました

一旦そこに行きます」

『言ってるっしょーい』

通信が切れると同時に携帯がまた鳴った。

レリック探しに使った地図に新しく紫のマークが映っていた。
これっばいな。

えーっと、今逃げてる方向の逆……。

クアットロさん、あなたわざとでしょう……。

「ハア、仕方ないか……」

ため息を吐いて、空中で一気に旋回する。

そのまま後ろのあの人達のところまで突っ込んでいく。

「でやあっ！」

スバルが殴りかかってくる。

結構ギリギリのところ避けて下の方にあつた廃ビル群に入り込む。
そのままビルの谷間を縫うように進んでいく。

真っ直ぐに行けないのが辛いが仕方がないね。

あと、少し……！

「このまま行ければ……！」

テレーツデー♪

「またか！？

もしもし！？」

『千秋！

今すぐAMFを展開しろ！』

トーレさん？

何をそんなに焦ってるんすか？

『早くしろ！』

死にたいのか！』

「は、はあ

了解っす……

『AMF起動、2

…ギンガ side…

チアキさんに逃げられてから、地上に出た私は爆発音と魔力反応を感じた。

妙な不安を抱えながらその現場に向かった私の目の前に何かが落ちてくる。

「な、なに……？」

何が落ちてきたかもわからずにいると機動六課から通信が入る。

『八神部隊長、ディアボリックファンゲ

敵一人に命中！』

『了解や

命中した被疑者の確認と確保！

急いでな！』

その通信を聞いて私は驚愕した。

先程感じた妙な不安は当たってしまった。

「……陸士108部隊ギンガ・ナカジマより機動六課へ命中した、被疑者を、確認……」

何故か涙が出た。

「被疑者の、名前は

シイナ、チアキです」

私の前で瓦礫に埋もれ、ボロボロになったチアキさんが倒れていた。

「う……、あ……」

チアキさんのうめき声が聞こえる。

「チアキさん！

大丈夫ですか！」

肩を軽く叩いて、声をかけて意識を確認する。

「チアキさん！」

「うる……さい……」

返事が返ってきた。
本当に予想外だった。

「痛っ、てえ……
なん、だよ……、今の……」

「チアキさん
今は動かないでください！」

立ち上がろうとするチアキさんを無理矢理その場に寝かせる。
こんなにボロボロな人を歩かせるわけにはいかない。

「今は安静にしててください」

私はそう言ってチアキさんの傍に座って、彼の頭を太ももに乗せた。

なぜだろうか。

ずっと、こうしてみたくて。
ずっと、こう望んでて。
今、少しだけ望みが叶って。

少しだけ、幸せだった。

…千秋 side…
うーん、どうしよう。

動こうとしたらギンガに止められて、しかも膝枕されるって……。

ええ、嬉しいですよ？

でもなんでこうなったのかが理解できない。

不幸なんだかそうじゃないんだかよくわからない。

……ギンガが何故嬉しそうなのかもよくわからない。

ああもう、頭がこんがらがってきた。

寝よう。

寝てしまおう。

そうしよう。

さっきから意識がはっきりしてないのもあるし今は寝よう。

そう決めてから目を閉じて眠りにつくのは早かった。

『……っ！

……！』

寝る時に何か聞こえたけど気にしない。

おやすみなさい。

第七章・撃墜（後書き）

千秋「なんかごちゃごちゃになってねえ？

しかもあんなオチって……」

作者「次回にご期待ください」

千秋「で、文化祭の感想は？」

作者「IHクッキングヒーターとフライパンとスライドハンガーが
当たりました」

千秋「学校気前良いな……」

作者「他の方はP S 3とか3 D Sとか3 2型のTVとか当たってま
したよ」

千秋「どういうことなの」

作者「ではまた次回」

千秋「また読んでください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068s/>

『普通』の高校生の『異常』な物語

2011年10月29日18時54分発行